

# 井伊宗観

淡交テキスト・ブック  
茶人編

3



康の手に入った。宮王太夫とは、金春流の能の人で、堺に住み、茶の湯も深く嗜んで、名器を所持していた。この宮王太夫の弟の妻が利休に再婚したと伝えられる。姿大振りで釉色の变化も美しく落ち着いて、大名物の位にそむかぬ端正な茶入である。また直孝は、有名な東山時代菊鷲蒔絵の硯箱をも家康から拝領している。

こうした大名物を伝来した井伊家であったが、代々あまり茶の湯好きの藩主は出なかつたらしい。だがいつごろ入ったか知らないが、利休瀬戸山科茶入や玳皮蓋梅天目茶碗、有樂所持利休尺八花入などの名品も伝わった。そうした茶道具がたとえ直弼の代に蒐められたものであったとしても、また四十六歳という生涯の短さを考えに入れても、彼が名器の蒐集に関心が強かつたとは考えられない。そこに同じ大名茶人でも、松平不昧らとはちがった井伊宗観の茶に対する心の構え方があらわれているといえよう。名器の蒐集がおこな